



胡蝶の夢

芋焼酎のおっさん

出会い

夢に胡蝶となる

ある日、莊周は夢の中で蝶になりました。

ひらひらと舞う様子は胡蝶そのものでありました。

気分は晴れやかで、蝶である自分をのびのびと楽しんでいました。

自分は生まれながらにして蝶であり、莊周のことは全く分からなくなっていました。

やがて目が覚めて我にかえると、なんと自分は蝶ではなく莊周という人間でした。

自分は蝶になった夢を見たのでしょうか、それとも蝶である自分が莊周の夢を見ているのでしょうか。

胡蝶と莊周、どちらが夢でどちらが現か本当に区別がつくのでしょうか。

自分の一生も、何者かの見ている一夜の夢かもしれません。

黄色い潜水艦

次第に薄れていく意識の中で、ぼんやりと光る天井の裸電球が、ゆらゆらと揺らいで見えました。

駄々をこねて買ってもらった黄色い潜水艦を、おじいちゃんの屋敷のお風呂で浮かべて遊んでいるうちに、頭からドボンと落ちてしまいました。

不思議に苦しさとか恐怖は感じませんでした。

ただ「一人でお風呂場で遊んだらダメよ」という、母の言付けを守らなかった事で、叱られるのが心配でした。

母の悲鳴のような泣き声で、ぼくは意識が戻りました。

ぼくの周りには、大勢の人達が集まっていました。

怒ったような顔をしてぼくを見つめる、幼稚園のスモック姿の兄も見えました。

「おかあさん、ごめんなさい。 もうひとりで、おふろばでは遊ばないよ」

不思議な女の子

秋の穏やかな日差しの中、ぼくは中庭に面した濡れ縁に腰かけて、小さな池の上に枝を伸ばした楓の木から、真紅の葉がはらはらと舞い散るのをぼんやりと眺めていました。

このおじいちゃんの古い屋敷の隣には、おじいちゃんの水飴工場もあり、今の時間はみんな水飴工場に出払っていて、広い屋敷にはぼく一人だけでした。

屋敷を覆い包む静寂を打ち破るように、柱時計の鐘の音が響き渡りました。

柱時計を見ると、兄が小学校から帰って来るまでには、まだ一刻ほどあります。

再び中庭に目を移すと、楓の木の脇に女の子が立っているのに気が付きました。

女の子は肩まである艶やかな黒髪に、はっきりとした目鼻立ち、蝶々の舞う絵柄の赤い着物という古風な出で立ちをしていました。

「ねえ、そこで何をしてるの？」

「おぬしを見ておった」

「どこから来たの？ ぼくの名前はちひろ。 きみの名前は？」

「茜じゃ」

「あかねちゃん、いっしょに遊ぶ？」

「よかろう」

おじいちゃんの水飴工場

愛らしい外見とは不釣合な話し方をする不思議な女の子と一緒に、おじいちゃんの水飴工場に向かいました。

熱気に満ちた工場の中には大きなタンクや窯が立ち並び、大勢の人達が材料を積んだ台車を押し回して、狭い通路を忙しそうに行き交っていました。

ぼくたちはその狭い通路を、働く人を避けて縫うようにして歩き、工場の奥にあるポン菓子部屋に向かいました。

最近出来たばかりのポン菓子部屋には、大砲のような形をしたポン菓子機が並んでいました。

白い作業着に長靴のおじさんが、ガスバーナーの火力を調整しながら、頃合を見計らってポン菓子機の留め金を木槌で叩いていきます。

「バン！」 耳の鼓膜が裂けそうな大きな爆発音と共に、大量のポン菓子が飛び出してきました。

女の子が「ひっ！」と小さな叫び声を上げて、飛び上がりました。

「はっはっはっ！」 「ふっふっふ・・・」

おじさんが木槌を振るうたびに、ぼくたちは両手で耳を塞ぎ「わー！」と、ポン菓子機の爆発音に負けないような大きな声で叫びました。

やがて部屋の隅には背丈ほどのポン菓子の山ができ、おじさんが休憩で部屋から出ていくと、ぼくたちはまだ熱く芳ばしい香りのするポン菓子の山の中に頭から飛び込み、泳ぐようにして遊びました。

おじいちゃんの古い屋敷は平屋でしたが、物置代わりに使われている広い天井裏があり、ぼくたちの格好の遊び場になっていました。

ぼくたちはここで一日中、鬼ごっこやカクレンボ、宝探しをして遊びました。

薄暗い部屋を恐る恐る進んで行くと、箆笥の上で気配を消して潜んでいた女の子が「うお〜！」と叫びながら飛び降りてきました。

「ぎゃー！」 恐怖で腰が砕けてしまい、四つん這いでやっと這うようにして逃げ出しました。

春には、裏の蓮華畑で花冠をつくりました。

夏には、鬼灯の実で笛をつくり、キューキューと鳴らしました。

秋には、庭の池の水面を楓で真紅に染めました。

冬には、濡れ縁の上に雪うさぎを並べました。

来る日も来る日もぼくたち二人は、本当の姉弟のようにくっつき合って遊びました。

時雨

時雨が陰鬱に降りそぼる晩秋のある日、おじいちゃんの屋敷に沢山の人が集まってきました。

お線香の煙が立ち込める薄暗い部屋に、おじいちゃんが白い着物を着て寝かされていました。

穏やかな表情で横たわっているおじいちゃんは、身に付けた着物と同じくらい白く、まるで蠟人形のように見えました。

「おかあさん、おじいちゃんはどうしちゃったの？ びょうき？」

母はぼくの問い掛けには答えず、次から次へと訪れて来る人達に、忙しそうにお茶やお菓子を出していました。

「彼岸へ旅立ったのじゃ」

女の子がいつの間にか傍に立っていました。

「ひがん？ おじいちゃんは死んじゃったの？」

「ああ、天寿を全うしたのじゃよ。 良い機会じゃ、おぬしも彼岸に向かうといい」

「えっ、ぼくが？ どうして・・・ぼくは元気だよ？ 毎日みんなとご飯を食べているし、誕生日とかクリスマスにはケーキでお祝いもしているよ？」

「それは仏膳じゃ。 おぬしも気付いておろうが・・・おぬしのふた親は既に初老を迎え、兄は所帯を持ち子をもうけておる。 それなのに、おぬしだけが三歳のわらしのままというのは、変であろう？」

「そんな・・・いやだっ！ 行きたくない・・・うっうっ・・・おかあさん・・・こわいよ・・・」

「聞き分けのないことを言うでない。 このままうつ世に執着を残せば、いずれ心無くし鬼となってしまうぞ。 わしもそろそろ、ここを去らねばならぬ。 案ずるな、わしがおぬしを彼岸まで送り届けよう」

「ぼくはもう、おかあさんに会えないの？ あかねちゃんは？ もう一緒に遊べないの？」

「おぬしと過ごした日々は、なかなか楽しいものであった。 想いがあれば再び相まみえることも、いつか叶うであろう。 じゃが、その時は全ての記憶を彼岸に置いてこなければならぬ

がな」

「じゃあ、あかねちゃんに会えたときに、どうすればあかねちゃんだと分かるの？」

「そうじゃのう・・・何か印となる物を・・・それは・・・」

女の子の顔がゆらゆらと揺らぎ、その声は次第にとぎれとぎれになり、ぼくの意識は白い霧の中に溶けていくように薄れていきました。

再会と別れ

天地の境も昼夜の区別もつかない濃い霧の中を、ぼくは彷徨っていました。

ここは何処なのか、何時からここにいるのか、そもそもぼくは何者なのか・・・

とりとめもない思いを一人巡らしていると、何処からとも無く真紅の蝶がひらひらと現れ、足元にふわりと舞い降りました。

足元に舞い降りた蝶をそっと捕まえると、それは手の中で真紅の楓の葉に姿を変えました。

霧の向うから、優しく語りかけてくる声が聞こえてきました。

懐かしさ、嬉しさ、いとおしさ・・・いろんな想いが胸に込み上げてきて、止めども無く涙が溢れてきました。

ああ、やっと・・・やっと、会える・・・

ゴチッ・・・痛っ・・・

後頭部に尋常ならぬ痛みを感じ、俺は目を覚ました。

「こら、起きろ」

焦点の定まらない目にぼんやりと映ったのは、ハードカバーの本を片手に仁王立ちでこちらを睨んでいる相棒だった。

「殴ったな・・・今手に持っているその本で、俺の頭を殴ったよな？ しかも角で！」

俺の抗議の言葉など全く意に介す風もなく、相棒は冷ややかな眼差しで一方向的に話しを続けた。

「はて、わしの記憶が正しければ、わしが委員会に出席している間に、新書のラベル貼りを済ませておくと、うぬに言っておいたはずだが？」

肩に掛かる長く艶やかな黒髪を片手で払い、腕を組み直した相棒の口からは、容赦の無い罵倒の言葉が降り注いだ。

「うぬは高三にもなって、この程度の作業もこなせんのか？ 猿にでもできる作業だ、猿にでも！ ああ、うぬを責めても、せんないことか、うぬは猿以下であったのう・・・っていうか、うぬと比べるなどとは猿に対して失礼じゃ、五体投地でお詫びしろ！」

俺はまだ痛みが残る後頭部を指で触り、血が出ていないか確認した。

「まったく、お前はなに訳の分からんキレ方をしているんだ・・・今から二人で手分けしてやれば、小一時間もあれば終わるだろ？」

「それでは間に合わんのじゃ！ 田園の苺ムースのロールケーキ、四時には完売してしまう超人気の一品じゃ。 今日こそはと楽しみにしておったのに・・・」

「だったらラベル貼りは明日にして、今から行けばいいじゃないか！」

「明日はないのじゃ、明日は・・・もうよいわ・・・」

相棒はそうポツリと呟くと、何故か急にテンションを下げて椅子に座ってしまった。

机の上には分類別に積まれた新書がまだ大量に残っており、相棒は溜息をついてラベルを貼り始めた。

俺が図書委員になったのは、何も本が好きだったからではない。

メンドクサイ役を押し付けられるよりはマシだと思い、先手を打って楽そうな図書委員になったのだ。

そして相棒になった女子が、こいつ神宮寺 茜だ。

相棒は俺と違って本物の文学少女で、何やら難しそうな本をパラパラとめくるようにして、すごいスピードで読んでいた。

俺はジャンプとかH系の雑誌ばかり読んでいて、文学などには全く興味が無かったので、たまに図書館に顔を出しても相棒とは殆ど会話をする事もなく、シール貼りや貸出カードの整理などの作業を、ただ黙々とこなしていた。

夏休みに図書館のカウンター当番になった時、せっかくだから課題の読書感想文でも書こうかと思ひ、自分にも読めそうな本を探していると、夏目漱石の「三四郎」が目にとまった。

小さい頃に、黒澤明監督の映画「姿三四郎」を見たのを思い出し、その原作だろうとカウンターに持ち帰って読み始めたが、いくら読み進んでも主人公の三四郎が柔道を始める気配がなかった。

そのことを隣に座っていた相棒に話すと、「馬鹿か？ それは富田常雄の小説『姿三四郎』だ！」と、蔑むような目付きで冷たく言い放たれてしまった。

そんな事があってから、相棒とは何となく話をするようになり、気が付くと休みの日も行動を共にするようになっていた。

図書館の時計が五時を回った頃、ようやくラベル貼りを終える事ができた。

「なんとか終わったな・・・なあ、田園のロールケーキは諦めて、これから松月堂の大福なんてどうだ？ おごるぞ」

「松月堂の大福のう・・・」

「そんなにか？ ロールケーキなんて、いつだって食えるだろ？」

「いや松月堂の大福はわしも大好きじゃ。 だが、田園の苺ムースのロールケーキは別格、最後に食べておきたかった・・・」

「最後に？ なあ、最近のお前はすごく変だぞ。 ボンヤリしている事が多いし、意味不明なことを口走るし・・・もしかして、神宮寺のおじさんの具合が思わしくないのか？」

相棒は寸の間、眉を曇らせたが、答えを返す事もなく机の上を片付け始めた。

相棒は五年ほど前から、遠縁にあたる神宮寺夫妻の家で暮らしている。

両親とは小さい頃に死別し、その後は親戚縁者の家を転々として育ったそうだ。

その頃の事はあまり話したがらないので、俺も詳しい事情は知らないでいた。

神社で宮司を勤めている神宮寺夫妻には子供がいない事もあり、相棒はとても可愛がられているようだった。

その神宮寺のおじさんは、一年ほど前に病に倒れ入院していたのだが、最近退院し自宅で療養していると聞いていた。

図書室の片付けも終わって、ようやく相棒が口を開いた。

「松月堂に行くぞ」

学校のある賑やかな表通りから辻一本入り込むと、街並みは一変し、古い町屋敷や商家の蔵屋敷が建ち並ぶ様子は、さながら昭和初期にタイムスリップしたような感覚になる。

古民家を改装して作られた松月堂は、和風の落ち着いた感じのお店で、四季折々に店内の装いを変え、訪れる客の目を楽しませていた。

今はすすきの穂や真紅の楓の枝などで店内は飾られ、大きな朱傘の下にはお菓子の並んだ卓が置かれ、野点の風情を演出していた。

建物の外観は一見平屋だが、内部は天井裏を改築しロフトのような作りになっていた。

ぎしぎし軋む階段を上ると、二階は意外に広い喫茶スペースになっていて、和箆笥や火鉢、柱時計などの古い家具が飾られていた。

相棒はせっかく注文した、いちご大福には全く手を付けようとせず、大福に添えられていた楓の葉を手に取り、ぼんやりと眺めていた。

「なあ、おじさんの具合はどうなんだ？ 良くないのか？ 言いづらいのなら、無理に話さなくてもいいけど・・・」

「もう長くはあるまい・・・人の命とはほんに儂いのう。 わしも人形を保つのが難しくなってきた、ここもそろそろ去らねばならぬ」

「ちょっとまって！ 良くないって・・・おい、大丈夫かよ？ ここを去るって、何のことだ？」

「そなた、手のひらを出して見せよ」

「なんでだよ？ そんな事よりお前、絶対変だぞ！ 言っている事が支離滅裂・・・」

「よいから手を出せ・・・」

相棒はテーブルから身を乗り出すと、有無を言わさぬ強い力で俺の手を掴んだ。

すぐ目の前に相棒の長い睫毛が迫り、艶やかで長い黒髪からは、ふわっと甘い香りが漂ってきた。

相棒は真紅の楓の葉を俺の手のひらに乗せると、その上に白く柔かな手を重ねた。

店内に飾られていた古い柱時計の鐘が突然店内に鳴り響いた後、俺たちは完全な静寂に包み込まれた。

俺は全てを理解した。 いや、正確に言えば俺の中に眠っていた『千尋』が目を覚まし、その想いが激流のように一気に流れ込んできた。

音も無く真紅の楓が舞い散る池の端に、蝶々の舞う絵柄の着物を着た相棒の姿は、壁に飾られた一枚の絵画のように美しかった。

「そなたの中の『千尋』はわしが連れて行く。 そのような顔をするな、そなたとはすでに深い

縁で結ばれておる故、いつか必ず・・・その時は・・・あまりきつく叱るではないぞ・・・」

はらはらと舞い散る真紅の楓の葉が、相棒の姿を覆い隠していった。

店内に響きわたる柱時計の鐘の音で我に返ると、俺は広い喫茶スペースにたった一人で座っていた。

俺はどうして、ここにいるのだろうか・・・

テーブルの向かいには何故か、いちご大福とお茶が置かれていた。

微かに甘い香りが漂い、今しがたまで誰かがいたような気配が残っていた。

しっかりと握り締めていた手のひらを開くと、真紅の楓の葉がはらりと落ちた。

テーブルの上に、二つに折られたメモ用紙が置かれていた。

手に取り開いてみると、可愛らしい文字で和歌がしたためられていた。

忘られてしましまどろむ程もがな　いつかは君を夢ならで見む

拭っても拭っても、訳も分からず頬を伝わり落ちる涙に、俺は戸惑った。

時を越えて

真紅の楓の葉が音も無く舞い散る池の端に、私は一人佇んでいました。

池をのぞき込むと水面に長い黒髪の少女の姿が映りましたが、舞い降りた楓の葉が作る波紋に揺らいで消えてしまいました。

水面に浮かぶ楓の葉を手にとると、何か大切な事を思い出しそうになりました。

柱時計の鐘の音、甘い香り、重ねた手の温もり、とても大切な人・・・

その姿、交わした言葉を思い出そうとすればするほど、記憶の欠片ははらはらと舞い散るように消えていきました。

失うまいと強く抱きしめると、淡雪のように溶けてしまいました。

最後に残ったのは、懐かしいという感触と頬を伝う涙でした。

「おきて・・・もう・・・おとうさんてばっ！」

「あ・・・」

「あじゃないの！ おとうさんクレヨンをふんでるの！」

穏やかな陽気の日曜日の午後、私は娘と遊んでいる間に、うたた寝をしてしまったようです。

食べかけのお菓子や絵本、おもちゃが散乱するこたつの上で、娘はスケッチブックを開いて絵を描いていました。

何故か頬が涙で濡れていたの、こたつの上にあったティッシュを手に取り、鼻をかむ振りをしてそっと拭きました。

「何を描いているの？」

「え～とね、れんげの花かんむり、ほおずき、もみじ、ゆきうさぎ」

「何それ、年寄り臭いものばかりだな・・・鬼灯なんて見たことあるの？」

「うん、ほおずきはね、なかみを出して笛をつくるの。ちひろ君はね、ほおずきをキューキュー鳴らすのがとってもじ

ようずなの」

「千尋君？ 幼稚園のお友達？」

「ううん、いつもは公園とか、神社にいるの。 おうちにも来たことがあるよ」

「お父さんも、会ったことがあるかな？」

娘は肩に掛かった長い髪を大人びた仕草で払い、私を見上げました。

「おとなには見えないんだって」

そう呟くと何事もなかったかのように、また絵を描き始めました。

デジャヴ・・・娘の言葉と仕草に、私は過去にも同じような情景を見ているという、不思議な感覚に囚われました。

足元に転がっていた黄色い潜水艦を手に取り、目が覚めたときにも感じた「何か大切な事」に思いを巡らせました。

しかし思い出そうとすればするほど、その「何か大切な事」は陽炎のように遠退いて行きました。

「あかね、公園へ遊びに行こうか。 寒いから上着にマフラーもしておいで」

「うん、わかった」

娘の小さな手を引いて、古い町屋敷が建ち並ぶ裏通りを歩いていると、子供の頃と変わらぬ佇まいの和菓子屋が見えてきました。

古民家を改装して作られた和菓子屋の中庭には、小さな池と一本の見事な楓の木がありました。

小さな池の上に伸びた枝からは、楓の葉がはらはらと舞い散り、水面を真紅に染めていました。

「あかね、帰りにお菓子を買おうね。 何がいい？」

「いちご大福！ あ、てふてふ・・・」

一陣の風が、真紅の楓の葉を空高く巻き上げていきました。

てふてふ ひらひら いらかをこえた

娘と二人、手をつないで見上げた空は蒼く高く、時を越えて何処までも広がっているように思えました。